問わず内向的性格児や、家庭教育に熱心と思われる家庭の子女である。否定型は女>男で、外向型の者が多いようである。条件付肯定型は学童>幼児となるが、性差は両児とも認め難い。婆と狸とではいずれが多く殺されてもよいかをみると学童女は婆>狸で有意の差が認められる。これは Oedipus complex ではないだろうか。昔話は原型に近いものを幼少年者には是非与えたいと思う。それは①原始人の Symbolismus と幼児の Animism と共通していると思われる。②原始人と幼児の Typismus は共通しているようである。③因果関係的に究明しようとしない点は類似しているようである。④原始人の同罪刑と幼児の因果応報性とは共通しているようである。以上の点より、幼少年児は理解され易いと思われる。幼少年者の Needs を躾の名のもとに抑圧することは憎悪を高めるように思われる。無意識面にほとんどの幼少年者がもっている残忍性、攻撃性、征服欲を正しく理解して昔話の世界で発散させたいと思う。

絵画製作における素材と表現について

財団法人幼児研究所
荒井澄子

調査にあたって

近頃絵画製作につかわれる素材は非常に多くなってきた。しかしそれらが子どもたちにどのように扱われているだろうか。ここにおいて最も基礎的と思われる描画、構成素材について技術性・表現・興味などについて私たちの園児の作品を通して調査してみた。

結果の考察

描画素材（パス・えのぐ・鉛筆）

表Ⅰに示されている通り技術的な困難度はパスでは発達段階に即した数が出ているが、えのぐについては二年保育で困難度が少なくなっている。鉛筆においてはあまり差がみられない。このことは一年保育では形あるものを描こうとするのでえのぐで描くことをあまり好まず、パスで表現することを喜んでいる。二年保育ではなんでも良いから描こうとするので、その点一年保育と逆になっている。三年保育では筆が自由につかいきれないのでパス鉛筆を好んでいる。

指導上の留意点

三年保育は線がきで自己を表現しようとする傾向が強いのでパスを中心につかわせ、これにえのぐをつけ加えてパスの性質を知らせていったらよいと思う。二年保育はえのぐ中心に活動させることが出来ると思う。一年保育はえのぐを使わせる場合の方法として実験的、興味的な扱いを工夫してやればおもしろく出来るのではないだろうか。

構成素材（画用紙・中厚紙・粘土・木工・ポアスタイン）

画用紙（輪の構成）、中厚紙（三角組立て）で空間構成、粘土、木工、ポアスタインで立体構成を試みた。その結果は表Ⅱに示された通りである。

指導上の留意点

素材を私たちの頭のみで予想して与えたり与えなかったりするよ

りも一応は与えてみて、子どもたちがそれらの素材といかに取りくんでゆくかということをみることの方が大切だと思う。それと発達段階をよく理解して技術抵抗の大きい小さいをよく考え、技術抵抗の少ないものを与えすぎたため創造的な活動までゆがめられることのないよう気をつけねばならないと思う。

むすび

描画活動をきらっていた子どもが構成活動になると喜んで参加することがある。①能力に関係なく表現出来、②優劣の差が簡単に認められない、③自由自在に表現出来るからである。

（表Ⅰ）描画素材の表　(%)

分類	素材	一年保育 パス	一年保育 えのぐ	一年保育 鉛筆	二年保育 パス	二年保育 えのぐ	二年保育 鉛筆	三年保育 パス	三年保育 えのぐ	三年保育 鉛筆
技術性	容易	25	7	34	22	18	34	20	0	34
	普通	69	52	40	53	60	44	41	50	40
	困難	6	41	26	25	22	22	39	50	26
表現	容易	70	54	49	53	52	45	50	17	26
	困難	30	46	51	47	48	55	50	83	74
創造性	独創的	57	30	43	32	30	35	41	17	26
	模倣的	40	53	35	43	48	27	0	17	0
	その他	3	17	22	25	22	38	59	66	74
興味	ある	88	76	88	89	84	86	82	58	100
	ない	12	24	12	11	16	14	18	42	0

（表Ⅱ）構成素材の表

分類	素材	一年保育 画用紙	一年保育 中厚紙	一年保育 粘土	一年保育 木工	二年保育 画用紙	二年保育 中厚紙	二年保育 粘土	二年保育 木工	二年保育 ボアスタイン	三年保育 画用紙	三年保育 中厚紙	三年保育 粘土	三年保育 木工	三年保育 ボアスタイン
技術性	容易	39	56	35	24	39	18	40	16	—	18	0	34	10	72
	普通	43	36	54	50	39	23	16	26	—	25	34	26	27	28
	困難	20	8	11	26	22	59	44	58	—	57	64	40	63	0
表現	容易	65	84	83	63	65	32	56	48	74	33	0	50	36	91
	困難	35	16	17	37	35	68	44	51	26	67	100	50	64	9
素材	いかした	86	78	70	65	88	31	65	67	63	55	18	78	—	92
	いかさなかった	14	22	30	35	12	69	35	33	37	45	82	22	—	8
創造性	独創的	40	52	45	30	42	32	21	20	58	25	0	40	27	67
	模倣的	25	32	41	50	14	35	70	70	0	33	34	50	27	0
	その他	35	16	14	20	44	33	9	10	42	42	66	10	46	33
興味	ある	87	90	90	80	81	54	87	74	—	67	66	83	73	91
	ない	13	10	10	20	19	46	13	26	—	33	34	17	27	9

幼稚園における共同製作について

財団法人幼児研究所
馬場俊子

(1)いつごろから共同させたらよいか。

昭和三十二年五月～三十三年三月の間に共同画を与えてみた変化の様子を示すと1表の通りである。この結果、みんなと仲よく仕事をするという経験をもたせるためには一年保育児には六月から二年保育児には一月頃から共同させたらよいと思う。三年保育児には共同はさせなくてもよいだろう。

(2)どんなグループ構成が適当か。

(イ) グループの分け方――もっともよいグループ分けというものは一口には言えない。なぜなら、各テーマに応じて適当なグループ分けを考える必要があるからである。ただ、消極的なものばかりとか残りものばかりのグループができないように注意し、できるだけ仲よしグループにすることがより効果をあげたようだった。

(ロ) グループの人数――一年保育では三人～八人のグループを二年保育では二人～七人のグループを作って共同させてみた。成功度合をA・B・Cの三段階に分類して考え、人員別に成功度合を示すと2表の通りである。この表から一年保育では六人まで二年保育では四人までなら共同でできるといってよいだろう。